

発表の敷居を下げて主体的な学びを促す

音楽の学習において音符（リズム）は、音と符合を同時に学ぶのでICT機器を用いることで、その二つの情報を同時に得ることができます。自分で直感的にリズムを組み立て、自分で演奏することで確認し、友だちとリズムを披露しあうことで学びを深めることができます。デジタルコンテンツを使用すると失敗しないよう設定できるので安心して取り組みます。

<高等部 1 学年 リズム学習>



電子黒板とPPを使いタッチで音符を選び、リズムを作成する

ICT活用のポイント

音楽の授業で気を付けているのは失敗経験を積まない事です。ICTを使うことで失敗を恐れず、楽しんで学習に取り組めることで、「もっと」を引き出せる授業になります。

クラウドを活用し、家庭学習を豊かにする

集団学習で行ったリズム教材をクラウド上で共有することで、家庭で同じ教材を使い復習として学びを深めることができました。保護者の方も一緒に取り組んでくれたので、一緒に楽しみながら学びを共有することもでき、自分の学んだことを披露することで褒められ、自己肯定感を高めることにつながることもありました。

成功体験を重ねることで授業への参加意欲が日々高まり、次はどんな内容か尋ねる、進んで発表を行う、問いかける前から答えを考え始める等の主体的な授業参加が増えてきました。

<高等部 1 学年 リズム家庭学習>

ICT活用のポイント

PPでのICT教材は作成にどうしても時間がかかっています。学校内で共有することはもちろん家庭学習等活用できる場所を増やすことで、1つの教材を作る時間がかかった事を補っていくことができると思います。

発表の敷居を下げて主体的な学びを促す

ねらい：ICT機器利用の活用による利便性や有用性を感じさせる。
ICT機器の利用で学習のしやすさを確保し、話し合いに集中させる。

単 元：メロディに伴奏をつけよう
与えられた曲にコードをつける。その際グループで1小節ずつコードを試聴して話し合いの中で決める。
その後全体で発表する。

対象の生徒

本校は総合的な探究の時間を4つ(チャレンジ検定・チャレンジスポーツ・チャレンジカルチャー・チャレンジミュージック)に分けて選択できるようにしている。本事例は「総探チャレンジミュージック」におけるものである。

総探チャレンジミュージックは、高等部1～3年生で構成させており、知的・肢体ともに軽度～中重度と幅広い障がいの状態の生徒が学習している。

単元設定の理由とICT機器の利用

総探チャレンジミュージックは選択制であり、本授業でやりたい、学びたいという生徒が集まっている。その期待に応えると同時に学習指導要領にある「課題の発見・解決」という目標達成のため、学習の進度ばらつきが生じないようにICT機器を利用して次のことを行った。

- ・ 自主練習のために個々のiPadに見本の動画を入れる
- ・ iPad「ガレージバンド」を利用した学習
- ・ 操作を視覚的に理解するための大型テレビの利用

発表の敷居を下げて主体的な学びを促す

単元：メロディにオリジナルの伴奏をつけよう

ICT機器の利用によって「できる」授業へ

- iPadガレージバンドを利用し、簡単に伴奏がつけれるようにした。
- iPadに見本動画を作成し、支援をフェードアウトできる、「自分たちでできる」へと移行した。



主体的・対話的で深い学びの実現へ

- 誰でも簡単に「一人でできる」
生徒は直観的な操作で活動でき、生徒が迷うことなく話し合いに集中することができる。また、肢体不自由のある生徒もタッチ操作で操作がしやすく参加がしやすい。
- 教師も迷わず操作・指導できる
ICTの恩恵は生徒だけでなく、教師側にも働く。授業でICT利用の促進、学び方の研修(OJT)、スムーズな支援指導など、メリットが見られた。

映像を使って視覚的な支援を行う。（作業工程の説明）

- ★特別支援学校に通う児童・生徒の中には、言葉だけの説明だとイメージができない子どもがいるため、映像を使って作業工程を説明するようにした。
- タブレット端末を使用し、作業工程をカメラ機能を使って撮影したのちに映像編集のアプリケーションを使い、文字等を入れる。完成した映像を電子黒板にミラーリングで映しだし、児童・生徒に提示する。
（例は図工での作業工程の一部）

児童・生徒の様子

→ 映像を見ながら、自分で作業に取り組める児童・生徒が増えた。

ICT活用のポイント

★タブレット端末を使用することで、簡単にデータの共有（エアドロップ）できるので複数の教室で同じ映像を使用することができる。

★タブレット端末で児童・生徒の様子を撮影できるので、その場で手元を写し、書画カメラのように使用して説明することも可能。

※使用した機器
タブレット端末（Ipad）
電子黒板
※アプリケーション
映像編集ソフト
（IMOVIE）



絵の具の塗り方を映像で提示する（動画30秒）※一部

ビデオ会議アプリを使用した全校集会（始業式、終業式）

- ★感染症対策のため、通常体育館で行っている始業式、終業式を各教室に設置してある電子黒板を使用し、オンラインで行った。
- ビデオ会議アプリで校長先生と各教室を中継する。

児童・生徒の様子

- ・集団が苦手な児童、生徒でも教室で式に参加することができた。
- ・全校生徒が集まると後ろの児童・生徒から話をしている人が見えずく集中できないという問題があったが、映像だと校長先生の顔もよくかかり話を聞く児童・生徒が多かった。

オンラインの全校集会

ICT活用のポイント

- ★式の前に教員で通信状態のチェックやログイン方法をテストをした。そこで問題点などを確認できたので大きな失敗などはなかった。
- ★通信環境が突然悪くなり見れなくなることが数クラスあった。その際には、近くで正常に映っているクラスで見ってもらうなどの対応をした。

※使用した機器
タブレット端末(iPad)
電子黒板
※アプリケーション
ビデオ会議アプリ
(Webex Meetings)



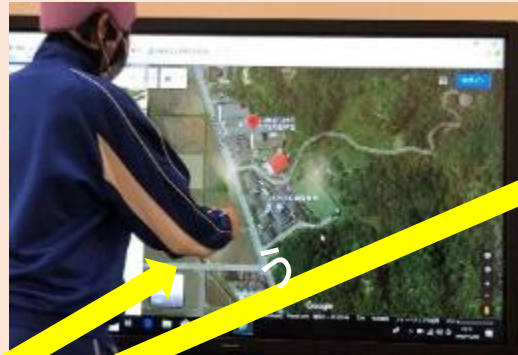
GoogleMapの活用した体験的な学び

<生活単元学習>

コロナ禍で、外出の制限がある中、Google Mapのストリートビュー機能を活用し、学習の中で子どもたちが気になる場所を見て調べたり、周辺を散策をしたりなど疑似体験をさせることで学びを深めることができる。また、ICTを活用することで、例えば、観光地見学など、通常授業では距離的、時間的にも不可能な事柄も、距離や時間の壁を越えて子どもたちが体験することを可能にできる。

1

学習の中で出てきた場所や、子どもたちが気になった場所を調べるなど目的をもつ。



2

Google Map上で目的地を探したり、検索機能を使用したりする。



ホワイトハウス見学もできる



3

ストリートビュー機能を活用して、施設内や周辺を散策。



ICT活用のポイント

本授業では、Google Mapを活用する力を身に付けることが目的ではなく、体験的な学びを通して、物事の本質を学んでいくことが目的である。

電子黒板を使うことで、意欲が高まる、大画面で操作がしやすい、友だちと画面を共有できるなど効果があった。また、iPadの操作は、タップ、スライドなど簡単なものであり、使用している間に定着していった。

アプリは無料。ブラウザ版でも使用可能。

iPadを活用した調べ学習

<知的・作業学習>

情報収集・情報整理（個別）



文字の入力や音声入力
で検索

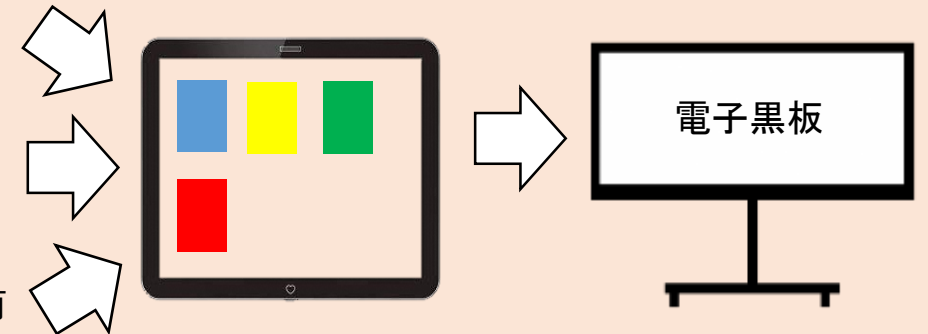


スクリーンショットで
画像等の保存※使用後削除

情報共有



AirDrop等で情報を共有



課題解決に向けた話し合い（協働）



集めた情報をもとに、話し合い。

話し合いから生まれた意見や課題は、電子黒板に書き込み（ホワイトボード機能）保存しておく便利です。

ICT活用のポイント

情報収集能力を高めるとともに、収集した情報をもとに、仲間と問題・課題を解決する能力を高める。また仲間との協働作業の中で、自分の考えを表現したり、説明したりする能力を高める。

口頭説明が苦手な話し合いに消極的な子どもも、画像を用いて視覚的に情報を伝えることができ、参加意欲を高めることができる。

タブレット用インターフェースの活用

<肢体・作業学習>

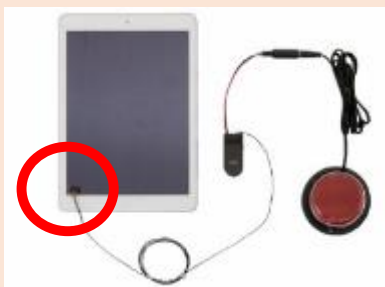
余暇活動



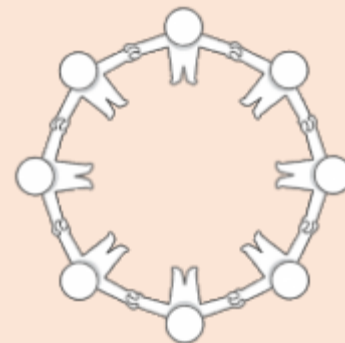
音楽をスタートする。



デジタル絵本のページをめくる。



人とつながる



支持機器

スイッチと連動し、
タブレットをタップ

紙式スイッチ



ICT活用のポイント

- ・身体機能や体調の状態に応じて、身体の動きや意思の表出を補助し、他者と触れ合う機会や余暇を楽しむ機会をつくる。
- ・子どもの身体機能やその時の体調に合わせて、スイッチを変更する。また、支援する機器を利用しやすいよう、支持機器の工夫が必要。

スイッチの例

<肢体・作業学習>



紙スイッチ（握る、軽く触れる）



子どもの動きに
応じて紙の厚さ、
固さを調整する。



スイッチ（顎で押す、手で押す）



イラストを用い
るなど子どもの
意欲を高める。



ボタン式スイッチ

主体的に行動しようとする力をICTと実物で引き出す取り組み

<小学部>

背景

特別支援学校に通う児童の多くは、学校と放課後等デイサービス、家庭で過ごすことが多く、自然や生き物と触れ合う機会が少ない。また、身体的な障害から、屋外の活動が難しい児童もいる。そういった児童生徒にも生き物と触れ合う機会を作ろうと、ICTを活用し、生き物の生息場所の動画や生き物を捕まえる動画を視聴させ、その後、本物の生き物と触れ合う機会を作った。

【生活単元学習：生き物と触れ合おう（ザリガニ釣り）】

対象：小学部低学年の児童12名

目標：生き物と楽しみながら触れ合うことができる。

自分の力でザリガニを釣ることができる。

ルールや順番を守って、活動することができる。

ICT活用のポイント

大型テレビに、信頼できる担任の先生が登場し、児童に話しかけながら生き物の生息場所やザリガニの釣り方を分かり言葉と映像で紹介した。

児童の実態に合わせてSTの先生は、どんな場所に生き物がいたか問いかけたりし、課題発見、課題解決できるようにした。ICTを活用した後に、本物の生き物が登場し、学びを深める実践につなげるよう心掛けた。



<動画映像を4つの場面で表示>

主体的に行動しようとする力をICTと実物で引き出す取り組み

<小学部>

【生活単元学習：生き物と触れ合おう（ザリガニ釣り）授業の流れ】

①生き物の生息場所の動画や生き物を捕まえる動画を視聴



②本物の生き物（ザリガニ）登場



③先生がザリガニ釣りの手本を見せる（釣り方の確認）



④自分でザリガニを釣ってみる



ICT活用のポイント②

映像を見せるだけで終わるのではなく、本物が登場し、実際に触ったり体験したりしながら、学びを深める取り組みにしているところ。児童のやってみたい!を引き出す授業実践。

より映像に注目できるように、刺激を除去するなど、児童の実態に合わせた合理的配慮を行う。

子どもたちを注目させるため、ライブ映像のように、語りかける。

生き物の生息環境や釣り方が伝わるように、短い言葉で説明する。

授業の結果

- ・生き物の生息場所も確認できたため、「ザリガニは石や木の下に隠れることが好きだね」などと感想を言う児童や、図鑑でザリガニについて調べたり、水替えなどザリガニの世話を自ら行う児童も見られた。
- ・車椅子の児童も生き物と触れ合うことができ、生息場所に行けなくても楽しく活動することができた。

★学びのまとめとして、単元最後にザリガニや魚を川へとりにいく

主体的に課題・問題を解決しようとする力を引き出す取り組み

<高等部>

背景

特別支援学校高等部で企業就労を目指す生徒の多くは、決して就労意欲が高いとは言えない。特に高等部1年生、2年生は、「どのような仕事があるのか、どのような仕事が自分はしたいのか」などが分からない生徒も多にいる。体験実習を1年生から2回実施するだけでなく、「働くこと」について考える機会を設けるために「卒業生の体験談を聞く会」を開催した。その際、働く様子を動画で映し出すだけでなく、話す内容も写真やイラストに合わせてスライドで表示した。

【職業：卒業生の体験談を聞く会】

対象：高等部で就労を目指す生徒22名

目標：卒業生の体験談を聞き、学校生活の中で身につけておかなければならない力や技能について知り、就労意欲を高める。

ICT活用のポイント

大型スクリーンに、就職した先輩の働く写真や動画、イラスト、話の内容などが、先輩の話に合わせて表示され、生徒に視覚的に分かりやすい説明となるようにした。

生徒にとって身近な会社に就職した先輩を招き、働くこと以外に、お金の使い道や、休日の過ごし方、将来の目標など、事前に生徒から集めた質問にも答えていただく時間を設け、生徒自身が主体的に考えられるような授業構成にした。



<先輩の紹介を進路担当の先生が行っている様子>

主体的に課題・問題を解決しようとする力を引き出す取り組み

<高等部>

【職業：卒業生の体験談を聞く会 授業の流れ】

①先輩の紹介（進路担当から）



②先輩さんの講演

- ・小学部からの思い出、頑張っていたこと
- ・仕事について・余暇について



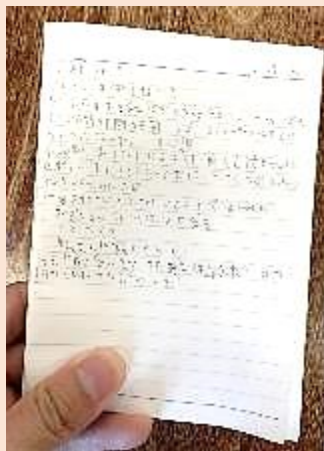
③質疑応答

ICT活用のポイント

話し言葉だけでは記憶に残りにくいので、話す内容に合わせて、文字やイラスト、写真などを表示した。

上記のようなICTを活用した視覚支援を通常の授業でも行うように、学校内で研修会を4回実施し、私だけでなく多くの先生が取り組むようにしている。

自ら大切だと思う
ことをメモする生徒
が多く見られた



卒業生の体験談を聞く会（動画：3分55秒）

授業の結果

- ・生徒からは、先輩の話が写真や動画、文字で表示されてとても分かりやすかったという感想が多く聞かれた。
- ・小学部1年生から本校に在籍し、「生活に必要な力」と「働く力」を12年間で身につけていけば、就職できることが分かり、授業後の振り返りシートでは生徒の就労意欲が向上した。その後の実習でもよい成果を出すことができた。

学校全体でICTを活用する

<小学部・中学部・高等部>

背景

新型コロナウイルスの流行に伴い、3密を避けた学校運営が求められていた。全校朝会などは体育館に全校児童生徒が集まることを避けるべきと意見が求まらった。全校朝会をライブ配信か、ビデオ録画を各学部、もしくは各教室で視聴する取り組みを検討した結果、ライブ配信では、話し言葉が伝わらないことが予想されたため、ビデオ動画を視聴する取り組みを実施した。ビデオ動画は、話す内容を文字やイラスト、写真で表示し、児童生徒に分かりやすい話・内容・提示をこころがけた。

【特別活動：全校朝会】

対象：小学部、中学部、高等部の全校生徒

目標：7月の全校目標を知り、3密を避ける取り組みを継続して行うことができる。

ICT活用のポイント

大型スクリーンに、生徒会の担当者や高等先生の話を読み出し、それに合わせて、文字やイラストで話している内容を視覚的に分かりやすく提示した。

背景を白など、シンプルなものにし、話している人に注目しやすいよう、不必要な刺激を除去した動画を作成した。

児童生徒が興味を持って見れるように、効果音やイラストを取り入れた。



全校朝会の校長先生の話（動画：1分26秒）

学校全体でICTを活用する

<小学部・中学部・高等部>

【特別活動：全校朝会 高等部の様子】



ICT活用のポイント

大型スクリーンで提示し、生徒にとって分かりやすい話・内容・提示を行った。小学部の児童にも分かるように、音声に合わせてイラストを提示した。

動画編集ソフトを学校で購入し、私以外の人も製作できるよう、研修会を実施した。

授業の結果

- ・児童生徒からは、校長先生や生徒会役員の話が写真や動画、文字で表示されて分かりやすかったという感想が聞かれた。また、話を聞いてマスクを自らつける児童生徒もいた。
- ・先生方からは、普段の全校朝会(体育館に全校集まって行う)よりも、確実に注視する児童生徒が多く、特に自閉スペクトラム症児も注視できており、動画の視聴の方が子どもにとって分かりやすいという意見が多数聞かれた。

↑これはCharlop-Christy, Lie, and Freeman (2000)の研究結果【ビデオモデリングは、モデリング(観察者の目の前にいるモデルを即時観察する手続き)より、ASD児の行動の獲得と般化に支援効果が高い)を裏付けるものであった。

新たなモデリング技法を開発し、授業や家庭学習に活用

<小学部・中学部・高等部>

アニメーションセルフモデリング (Animation Self-Modeling: 以下、ASM)を考案

ASMとは、対象児者がモデルとして登場するアニメーション動画を本人に視聴させ、それを手がかりに行動形成を図るもの

ASM

コマ送りの動き

背景なし

自分自身がモデル
(顔写真+イラストの体)

ビデオで見る

顔写真があれば製作可能。イラスト画の体に顔写真を張り付けて対象児モデルを作成

- ・コマ送りでとらえやすい動きをする
- ・必要な情報のみを表示(背景の削除・簡素化など)する
- ・製作時に対象児者に標的行動をさせる必要がない



図1 ASMの例(コマ1～3の順に読む)

見通しをもって活動する



運動会の事前学習で本人自身が登場するASMを視聴

・ポイント

- ・特別支援学校の児童にとって運動会演技は練習が急に始まり見通しをもちにくい活動の1つです。
- ・演技は1学期に学んだ学習をつなぎ合わせて構成。そして、本人自身が登場するASMを製作し、事前学習や休み時間にアニメーション映画として大型テレビで提示した。演技の流れや立ち位置、ダンスなどを楽しみながら見て、一緒に覚え、教師の支援がなくても行動できるようになった。

西田ら(2020)の研究では、ASMの視聴のみで、掃除スキルや電話の応対スキルなどの獲得に有効であった。

ICT活用の研修会の実施

特別支援教育の中で、どのようにICTを活用していけばよいのかを自分の実践や自校の取り組み例を紹介しながら、研修を実施した。

最も大事なことは、ICTの活用が目的になるのではなく、「子どもの実態に応じた支援」「ほめる・認める・励ます支援」「子どもの学びたいを引き出し、分かった、できたにつなげる支援」として活用することである。エビデンスに基づく支援、デジタルの支援と共にアナログの支援の活用をこころがけております！

2020年度実施例

- ・赤穂特別支援学校 校内研修 講師 4回(講演+動画製作等)
- ・姫路特別支援学校 研修会 講師 1日(講演+動画製作)
- ・明石養護学校 明石の会 研修会 講師 1回
- ・岡山大学「知的障害者指導論」, 特別講師, 3回
- ・特別支援学校 初任者研修 ICT研修 講師 1日(講演+動画製作)
- ・特別支援学校 教頭会 講師 1回
- ・播磨発達支援研究会 講師 1回 など

伝えたいこと (ICT活用の土台)

生活の質の向上

①子どもの実態に応じた支援	・できること	・好きなこと
	・できないこと	・苦手なこと

②ほめる。認める。励ます。

③子どもの学びたい！分かる！できそう！を引き出し、わかった！できた！につなげる支援(見る→行動)

キーワード: 実態把握・モチベーション・ABA・視覚支援
ABA: applied behavior analysis (応用行動分析学)

<研修会のスライド>



研修会の様子 →

ICT活用の研修を実施する中で、ICTを活用した授業実践(見る→体験する)の定着



＜美術の授業 作業手順も動画で説明＞



＜朝の会 iPadをタッチして朝の会の司会＞



＜作業学習 タイムタイマーを電子黒板に表示＞



＜体育 ダンスの手本や並び順等の提示＞



＜体育＞3分の休憩時間をタイマーで表示し、自分たち自身で時間を守って行動する(教師の声かけなし)

特別支援教育の中でのICT活用の拡大を図るだけでなく、教材づくりのノウハウも広めていく

特別支援教育で役立つ動画教材の作成方法をYouTube上で限定公開しています。
リンクにアクセスしてみてください。

- 1 <https://youtu.be/N5WMdO-N1B8> 01_ASM ビデオ教材(動画)を使った学習の有効性
- 2 https://youtu.be/MQWbJ_f6Cg 02_ASM 子どもの注視をひきだす動画の作り方
- 3 <https://youtu.be/m9OQLesVKOg> 03_ASM アニメーションセルフモデリングの作り方
- 4 https://youtu.be/V07MJk_lxKc 04_ASM 体の作り方
- 5 <https://youtu.be/n3lE55oY2dl> 05_ASM 顔の作り方
- 6 <https://youtu.be/1ae5v9yIK58> 06_ASM 体の動かし方
- 7 <https://youtu.be/FfOZT9Q3oro> 07_ASM 効果音やナレーションの入れ方
- 8 <https://youtu.be/v4Jw65umW8U> 08_ASM 活用方法 ①
- 9 <https://youtu.be/P8OVe075o1M> 09_ASM 活用方法 ②
- 10 <https://youtu.be/Vw1J3ON3FQA> 10_ASM まとめ 今後の活用に向けて



～軽度の視覚障害のある生徒への数学の指導におけるICTの活用～

<数学>

「必要な情報を自分で収集し、学校生活や社会の問題を見出し、卒業後も使用できるよう学習者端末を活用する。」

ねらい : タブレットの拡大機能や写真機能を使用し、自分にとってもっとも見やすい状況を実現する。

拡大コピーをしないといけないという課題を学習者端末を使用することで自分で解決できるようになる。

使用機材等 : iPad・カメラアプリ・スキャナー など

〔対象生徒の実態〕

- 高等部 2 年で軽度知的障害と軽度視覚障害がある。矯正視力で両目共 0.3 程度 身体障害者手帳 2 種 3 級
- 他の生徒が使用するプリントでは文字が小さく、拡大コピーをするか 2 2 ポイント程度で作る必要がある。拡大コピーは支援者が行っている。
- 個人のiPadをもっている。
- 本人や保護者の願いとして、「生活する力を身につけたい」という思いがある。

〔手順や操作方法〕

iPadに教科書のPDFをいれる。

授業で配布されたプリントをカメラ機能を使い写真フォルダーに入れる技術を習得する。

スワイプ、ピンチアウトなどの基本操作を覚え、自分が見やすい文字の大きさに調整する。



〔成果・結果〕

移動教室がある授業でも、iPadを持ち歩くようになり、自分が必要だと感じた時にICTを活用するようになった。それにより、指導者が拡大コピーを忘れたときにも困ることが減った。授業によっては、あらかじめ授業で使うデータを入れてくれる教師もいた。

「マーカーがひけたりするんですか？」「ここに印をつけることができますか？」と提示した機能だけでなく、これが使えたら便利だなと感じたことを教師に伝え、一緒に考えることができた。



ICT活用のポイント

本人が便利だと感じられるよう、生活と結び付けて活用方法を伝える。(例:「買ったCDの歌詞カードが小さくて見えなかったときにも使えるよ。」など)
本人が自発的にiPadを活用できるよう、他教科でも使用する場面を作ってもらう。

数字を書こう

<数学>

重度の知的障害のある生徒への数学の指導におけるICTの活用

ねらい : 数字を書く練習をする。

使用機材など : PC (Gcompris (教育用ソフトウェア) をインストールしておく) 、電子黒板

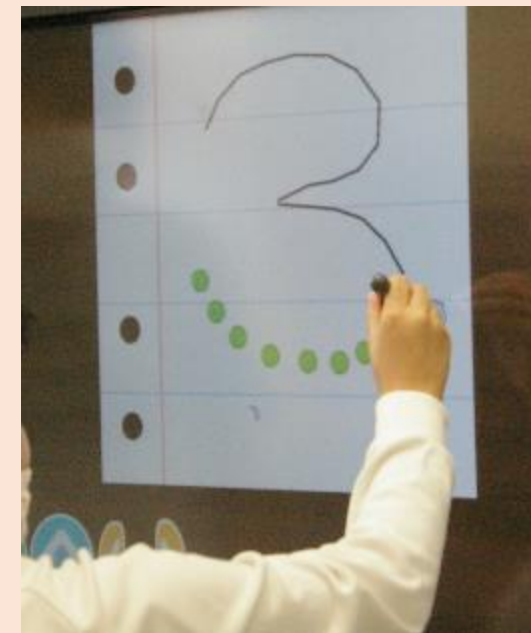
[対象生徒の実態]

重度の知的障害のクラスでは、数唱はできても数の概念が定着していなかったり、数字と数唱が一致しなかったり、また、数字が正しくかけなかったりという生徒がいます。

また、情緒的に不安定な生徒はなかなか授業に参加できない場合がありますが、ICT機器をゲームの様に使うことにより、生徒の興味を引き出し、積極的に参加することができるようになる場合があります。

[手順や操作方法]

1. PCと電子黒板を接続しておく。
2. PCでGcomprisを起動し、numeration→draw numbersを選択する。
3. 表示される点を指やタッチペンで辿って数字を書く。
4. 正しく書けると、賞賛の声と花が現れる。



ICT活用のポイント

PCと電子黒板をディスプレイケーブルと、USBケーブルで接続しておく、電子黒板を大きなタブレットPCの様に操作できます。

数の順番を理解しよう

<数学>

重度の知的障害のある生徒への数学の指導におけるICTの活用

ねらい : 点つなぎのゲームをしながら、数字の順番を理解する。

使用機材など : PC (Gcompris (教育用ソフトウェア) をインストールしておく) 、電子黒板

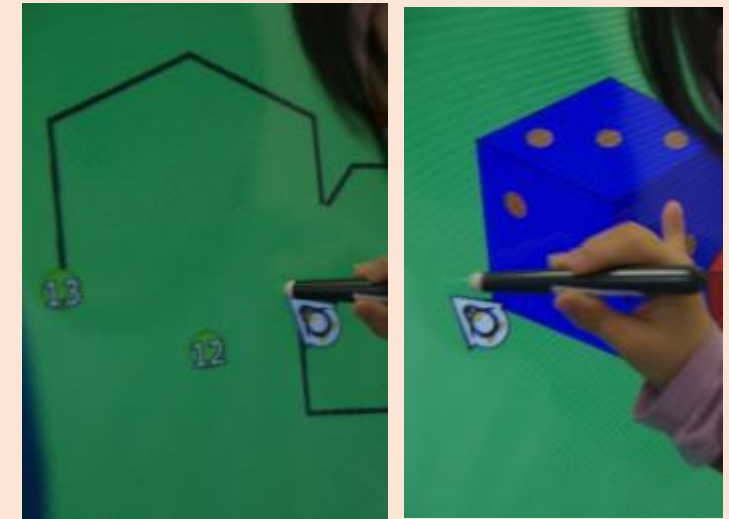
[対象生徒の実態]

重度の知的障害のクラスでは、数唱はできても数の概念が定着していなかったり、数字と数唱が一致しなかったり、また、数字を正しく書けない生徒がいます。

また、情緒的に不安定な生徒もあり、なかかなか授業に参加できない場合がありますが、ICT機器をゲームの様に使うことにより、生徒の興味を引き出し、積極的に参加することができるようになります場合があります。

[手順や操作方法]

1. PCと電子黒板を接続する。
2. PCでGcomprisを起動し、numeration→ number-sequenceを選択する。
3. 表示される数字を順番に指やタッチペンでタッチする。
4. 正しい順にタッチすると、絵が表示され賞賛の声と花が現れる。



ICT活用のポイント

PCと電子黒板をディスプレイケーブルと、USBケーブルで接続しておくと、電子黒板を大きなタブレットPCの様に操作できます。

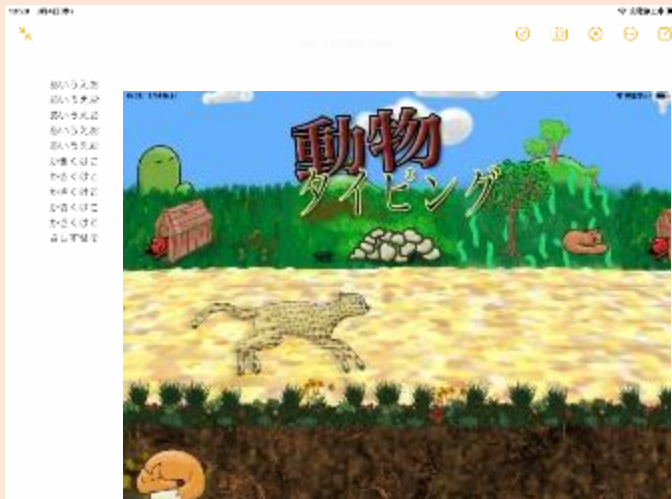
タイピングから始める情報機器の活用

実際に記録・計算・プレゼンテーションソフトを使用する前に、ローマ字を理解していない生徒から偏った指ではあるが、早く打てる生徒まで様々な実態があったので、それぞれの課題に取り組めるよう、時間設定を行った。フィードバックに関しては、実態に合わせて一人ずつ声かけを行った。

<高等部> 情報機器の活用

ICT活用のポイント

タイピングの速さを人と比べるのではなく、以前の自分と比べてどうだったかということを特に強調してフィードバックを行った。黙って課題に向かって取り組む生徒が増えた。



メモであいうえおタイピング
動物タイピングLITE

ICTを活用した学校課題解決学習

学校課題解決に向けて、学校をどうしたいかなどいろいろな意見をTeamsのチャット機能やメモのチェック機能などを用いて、課題解決学習を行った。生徒たちが主体的に話をできる環境づくりの一環として、普段あまり発言しない生徒がチャットでは色々な意見を出せるなど色々な意見が出ることで、集団としての意見を元に課題解決を考える経験ができた。

<高等部> 職業

ICT活用のポイント

意見を出す時に、喋っても書いても良いという風に伝えて意見を集めた。人前で意見を言うことに抵抗が出ないように配慮することで気楽に身近な課題について話せる環境設定に配慮した。



課題をteamsチャットを使って
ブレインストーミング